

こだま 臨時号 (災害支援)

平成 23 年 5 月 16 日



東日本大震災により亡くなられた方々のご冥福をお祈り申しあげますとともに、被災された皆様、そのご家族の方々に対しまして心よりお見舞い申し上げます。

ものは、水 8L・食料 12 食分・寝袋・着替えなど。
(食事はα米・登山用カップヌードル・レトルトの食品などを用意した)



東日本大震災支援活動報告

このたび、当院看護主任、清水弘二氏が日本看護協会の災害支援ナースとして東日本大震災の被災地へ派遣されました。4 月 7 日に出発し、4 月 11 日に帰って来るまでの活動の様子を紹介します。

～ 院内報告会 (4 月 22 日) より ～



派遣依頼・派遣までの経緯：以前より災害支援 Ns に登録 (日高管内では 2 名) していた清水氏に支援の打診が来たのは被災日 3 月 11 日の翌週。職務を調整し、4 月 3 日に活動日程を決め、7 日に出発することとなった。

被災地までの交通手段：集合場所は東京都渋谷区にある日本看護協会、そこからチャーターバス (車中泊) で宮城県仙台市青葉区・宮城県看護協会へ。その後各グループに別れ避難場所へバスで移動した。途中、震度 6 弱の地震を経験する。

準備：支援活動は自己完結型で行われるため、衣食住は全て自分で用意する。今回持って行った

派遣先・現地の様子：宮城県石巻市住吉中学校／避難者 230 人。被災地の様子はメディアからの映像・写真等で目にしていたが、道中、目に飛び込んできたのはその様子以上に悲惨な状況だった。映像と肉眼ではずいぶんと違った。避難所の様子は疲れた高齢者が横になっているという印象であった。

支援活動：体育館の器具室が医療室とされ、医師・看護師・救急車運転手でチームを組み医療班として活動、看護師は診療補助の仕事をした。それが 1 日の中で 4 時間程度、その他は介護や感染予防の指導・トイレの水入れ・夜間見回りなどフル活動し、睡眠は 3～5 時間という厳しいものであった。清水氏が行ったのは、震災から 1 ヶ月を迎える頃で救急を要する被災者よりも人間関係のトラブル等での心のケアが必要な方が多く、精神科 Ns として、傾聴することは意義があった。(直後では我慢できたことも、時間がたつと、どうにかしてほしいという思いでストレスがたまっている状況。)

また、期間中、1 名のノロウイルス発症患者があり、断水・自家発電・機材もない中で処置し予防することとなった。何もない状況でどうして行くのか? について考えさせられた。



(宮城県石巻市の様子)

◆ Q & A ◆

Q: 救援物資は届いていたか？また足りないものはどんなもの？

A: 食料は1人1日量で、おにぎり2ヶとパン7ヶは当たった。お弁当など、珍しいものがあるときは取り合いになることもあった。足りないものはビタミン・ミネラル（野菜類）が不足している。物資は日赤を通さないと被災者には届かないということで、なかなか細部までは行き届いていない。

Q: トイレの状況は？

A: 簡易水洗。水も不足しているので、ないときには新聞にくるんでビニール袋に入れ廃棄。

Q: 被災者はどんな状況？

A: 中学生の子が小さい子の面倒をみていたり、助け合っている状況がみられた。高齢者は周りの人とはコミュニケーションがとれない様子だった。

Q: 診療補助以外の支援内容は自分で考えるの？

A: 前任者の流れがあったのでそれを参考にした。多忙の中、最後まで健康でいることが大切なことなので、体力がいることを実感した。

Q: 支援Nsは男性女性どちらが多い？

A: 女性が多い

Q: 支援中は体育館ばかりにいたの？

A: 屋外は門までが敷地内、支援活動に集中していると時間がなく、そこからは出る余裕がなかった。

Q: ごみは？

A: 持ち帰り

Q: 色々な経験のなか、感じたことは？

A: 普段の自分の生活は幸せだなと実感した。

以上が報告会の内容です。

なお、報告会につきましては、4月25日の北海道新聞朝刊で紹介されています。



災害支援活動を終えて～

未曾有の大震災で感じたことは「生かされている」ということである。清水という人間が直感的に感じた偽らざる感性であろう。

老若男女、善人・悪人などを問わず多くの方が、今回の震災で命を落としている中、より多くの方は「生」に向けその時点から前に向かって歩き出している。

看護師として災害支援活動に従事できたのは、私個人の力でも何でもなく、目には見えない何か作用してこのような体験を得ることができたのだと、普段は素直に感じることのできない多くの周りの方々への感謝の意を今は実感している。

5病棟看護主任 清水弘二

石川副院長兼看護部長より



何も無いところで、あるものだけで看護を提供するという事は「ナイチンゲール精神・看護の基本であること」と改めて思っています。

地方の一民間病院から災害支援Nsを出せたことは地域に貢献する病院として、また清水主任個人として貴重な経験をしたと思います。

心のケアチームが必要であることはいうまでもありませんが、現況の当院からは出せる状況ではありません。今後、長期的に見て何かしらの支援をしていければ・・・と考えています。

～東日本大震災募金状況と報告～

3月28日～4月28日の期間中、当院受付にて募金箱を設置いたしましたところ、19,499円の義援金が集まりました。この義援金は日本赤十字社を通し、東日本大震災の被災者への支援にあてられます。

また、当院看護部からは、日本看護協会及び日本精神科看護技術協会を通し、日本赤十字社へ9万円を寄付いたしました。

編集後記

東日本大震災はM9.0、震度7、発生した大津波は国内で過去最大となる規模で、高さは20メートル以上、30メートルを超えたところもあり、多大なる被害を及ぼしました。被災者の方々の苦しみ・悲しみは、計り知れないものです。

それでも時は進みます。私たちは現状を風化させることなく、いつまでもこの気持ちを維持し、被災地の一日も早い復興を願いながら、できる限りの支援を続けていきたいと考えています。（中村）